

## その十七 シャボン玉

「俺の事、守モリから聞いたんやろ？」

「ううん」

俺は「ウン」という返事を待っていた。美英子を引付けけるために守が何らかの手を打ったと確信していたけれど……違ちがうと言われれば質問が続かない。

「ずーっと前から知ってたん」

このセリフは何度も聞いた。言い出しにくい話なのか「知ってたん」の続きを聞いたことがない。でも、もう我慢しなくても良くなった。

「大学のことや住んでるとこ、教えてもらったけど……そんなん、どうでもエエん」  
ついに美英子が告白する。

「神戸のコンサート……随分昔の事やけど、あのとき、ウチ、楽屋のトイレで聞いたん。夏子さんが守君の事、マモルに説明する段取りを話し合ってた……」

——えっ！ 春夜ハルヨじゃなく美英子だった！ いや、春夜もどこかで聞いてたかも

「……摩周湖で失敗したのに、同じやり方を押しつける守君に夏子さんはかなり抵抗したけど押し切られた……」

「摩周湖！ あれか！ えーと『シャッター、押してくれ』って夏子が近づいて……」

——やっぱり、あの時には守と夏子は付き合っていた！

俺は目を閉じて沈黙する。遠慮気味の美英子の声がする。

「……けど、また失敗した……話、続けてかまへん？ やめてもエエけど……」

摩周湖での出来事というより、そのときの守の行動を断片的に思い出した。アイツの行動は確かにおかしかつた。でも……美英子に大きく頷いてみせる。

「ウチは興味津々<sup>シンシン</sup>。何度、ノックされても出られへんし、音、たてたらあかんと思うてしやがんだま。クサイし水も流されへん。ほんまに、しんどかつた」

そう言えばコンサート会場の受付にいた美英子は香水プリンプリンだった。あれからもう三年近く経った。その間美英子はどんな気持ちで俺を見つめてきたのか。京都のデートがひとつの答えだった？ あのデートからも二年近く経った。

疑問はほぼ消滅した。と言うより美英子が消してくれた。急に愛<sup>トク</sup>おしさが込み上げるが言葉にできない。

——いつもの調子でいいか

「そうやったんか……どれぐらい聞いてたんや」

「？」

「トイレで聞いてた時間や」

「五、六分……もつと長かったかも」

思わず笑ってしまう。

「あきれたん？」

「いや……」

「何がおかしいん？」

「だって、パンツ下ろしたまま、しゃがんでたんやろ？」

「イヤやわ」

美英子は両膝を開いて顔を埋める。

「変な想像せんといて。恥ずかしい……」

折っていたジーンズを一段伸ばすと視線を戻す。

「ねえ、六甲駅に、なんで来てくれへんかったん？ 手紙、出したけど」

「行ったで！ 一時間も待った」

「えっ！ ほんまに？ ウチ、ズーツと待ってた……」

今度は視線を外さずにはにかむ。

「……一度、トイレに行っただけ」

向かいのホームで待ってたど、言えないからごまかす。

「トイレ、好きなんやなあ」

その十七 シャボン玉

「そんなこと……」

両手で顔を隠してうつむく美英子の頭が目の前に……

「髪の毛！」

うつむいたまま頷く美英子。

「前の日に切ったん。ウチ、怖かった」

「あっ！ おかつぱ頭の女の子がいた」

「おかつぱ？ 違う！ ビートルズと同じマッシュルームヘアオシナや！」

顔を上げて怒り出す。

「ビートルズ、好きなんか？」

「うん。大ファン」

「俺もや」

「ほんまに？」

「サージェント・ペパーズって、知ってる？」

「知らんかったらモグリや」

「一番好きなアルバム」

「ウチも！」

美英子は怒りを笑顔に変える。

「ウチ、最後の曲が一番好き！」

「A・DAY・IN・THE・LIFEや」

「モグリやない！」

『A・DAY』って、ひょっとして、今日の事かも！」

「そや！ 絶対そやや！」

視線がピツタリと合う。

「次の日も待ってたんか？」

「うん」

「その次の日も？」

「うん」

「三日もか……ごめんな」

「来てくれてたんや」

美英子は歓喜の涙を流しながらズルツと鼻水を吸う。

「ごめん。ウチってブスやし色気もない。せやからおかっぱに見えるんや」

もう一度鼻水を吸い上げると抱きついてきた。

「ありがと。本当にありがと。マモルは命の恩人や」

俺は抱きしめるだけで何も言えない。

「やっと、やっと、お礼、受け取ってもらえた。うれ（しい）……」

美英子の言葉を遮って強引に唇を重ねる。全身に電気ショックが走る。美英子も震え出す。このまま死んでもいいと思うぐらいの感動のケイレンに包み込まれる。

あの頃、あの時、俺の心の中で美英子にしつぺ返しの気持ちはあった。愛情と表裏をなす憎しみが混入していた。俺は愛情に確信を持てなかつたし、それまでのすべてを断ち切つて一人になりたかつた。

「毎日、電話、待った。あんなだけ電話くれたのに。出掛けたとき、帰ったら真つ先にオカンに確かめたけど。会いたかつた。それまでのウチは……恩知らずやつたもんね」

胸の中で鼻声が続く。

「お礼だけとは思つて手紙出したけど……来てくれへんと……」

確かに会うもんかと思つた。気持ちは若干高ぶつたけど、癒やしてくれるとは思わなかつた。一方で通学の降車駅だからと理屈を付けて期待した。

「髪の毛、切つて行つたら、来てくれへんかつても……」

またズルツと音をたてる。

「……来てくれた。こんな、うれしい事あらへん……けど、唇、痛い。けど、うれしい。ウチ、どうしたらエエン？」

\*

海上をゆつくり動く多数の光と六甲山中で点在する光の間に俺たちはいる。神戸の夜景は何処から眺めても美しい。ましてや風の強い今夜は浮き出たように迫ってくる。

逃避的に愛される事から逃避した美英子。対象は俺であり、対称に居るのは夏子。その狭間に守がいた。美英子が恐れたのは、守が俺と付き合ったまま夏子と結婚するという事態。あるいは夏子が守と結婚しなかった場合のその後。それでも美英子は細く長く踏ん張り続けた。それなのに俺はすべて破棄した。

そう！ 今日までデートしたのはたったの一回だけ。会ったのも三回だけ。心と心はよく絡み合ったけど接点を持つことはなかった。でも今日、すっかり接点を共有した。

風の中で美英子の吐息は時を刻み、触れる頬は熱く火照る。いつか……知床だった。

「三年前……」

海から俺に視線を移す美英子。あのテントで聞いたのと同じうわついた声を出す。

「三年前の今日……ウチ、抱かれたん。黒馬で一緒に飛び込んでくれたんも去年の今日……」

一度ならず、二度ならず……今日も含めれば……

「……三回も同じ日なんか」

すべての時計をかき集めて時間調整して美英子はやってきた。針が回り始めた時刻を尋ねる。

「夏子を、いつ知った？」

「マモルと出会うほんの、ほんの少し前」

「えっ！」

「観光路線バスで一緒やったん」

「そうやったんや……もう、どうでもエエなあ」

俺が過去を完全に捨て去ったと感じたのか、美英子は安心してきつたように涙を流す。そして鼻水をズルッと吸う音が……尻のポケットからピンクのハンカチを取り出す。

「これで鼻をかみ」

「エー！」

美英子が叫ぶ。

「まだ、持ってたん！」

ハンカチを見て美英子は笑いをこらえる。

「アカンか？」

「エエけど、笑かさんといて。唇痛い」

そう言いながら身を寄せてくる。俺は苦笑いしながら指を三本立てる。

『A・DAY』やなくて『THREE・DAY』やなあ」

「ううん。『THREE・DAYS』… 複数やんか」

\*

生まれたこと自体、偶然か必然かはわからない。そして確実に「時」が刻まれる。偶然なら



因果を求め、必然なら逃避する。やがて「時」が止まり決着する。

「時」そのものは存在しない。不死身なら「時」は不要。永遠を乞う有限の身だから「時」が存在する。だから「時」に縛られ「時」から逃れる事はできない。

「時が解決する」とは「時を忘れる」こと。逃避だ。いや、逃避と断言できない。

「時」を忘れるほどの瞬間を手に入れば「今」を充実できる。瞬間的な完全燃焼を止めどもなく続けられればあつという間に「時」が流れ、すべてが燃え尽きる。「時」を忘れる瞬間を持たば「今」が永遠になる。

有限の身だから「時」の流れを見つめなければならぬ。でも瞬間、瞬間を燃え尽きるように生きていけば……

それでも「時」は流れるだけ。ただそれだけの事か。

でも「時」を永遠の「今」に変換できるのは若者だけ……？ 青春は素晴らしい！

\*

黄昏<sup>ツツガレ</sup>が訪れる。しかし、高度成長を続ける日本経済の象徴である臨海工場群の照明が暗闇を押し返すから、お互いの顔がよく見える。抱き疲れて身体を離すと美英子が微笑む。

「ねえ、黄昏<sup>ツツガレ</sup>の意味、知ってる？」

「夕焼けの後の……うーん、わかれへん」

「教えたげる。キレイな夕焼けの後、暗くなったらお互いの顔、見えなくなるやんか。『誰そ彼<sup>ツツガレ</sup>』

つて言うのが語源なんやて」

「知らんかった。そこにいるのは誰や？ アンタか？……」

「ウチにはマモルって、すぐ分かる」

気分は再び最高潮に達する。

——「アホや、アホや」と言うけど、どの辺がアホやねん！ よっぽど俺の方がアホや

「じゃあ、行こか」

美英子が悪戯っぽく笑う。

「どこへ？」

「あつ、そうか……。俺ってアホやな」

「ウチら仲間や」

いつの間にか波が強くなってきた。満ち潮？ 大潮？ 高潮？……時々結構大きなしぶきが上がる。取りあえず手を取って一段上る。

消波ブロックで波打ち際が分からない。それでいい。プラスチック製の容器やゴミがひしめく海面なんか見たくもない。ところが、急に思いもよらない高くて強い波が消波ブロックを超えてくる。

「バsshャーン」

次の瞬間、周りが大小様々なシャボン玉だらけになる。

「わあ！」

洗剤が入った大量のボトルが裂けたのか、無数のシャボン玉が工場群からの光を受けて美しく輝く。言葉にならない幻想的な世界が広がった。様々な色のシャボン玉がまわりつく。近くを船が通ったのか、次々と迫る波を受けてはじめてもはじめても生まれる。ただ、ただ見られる。

しばらくするとあれだけあったシャボン玉が音もたてずにすべて消える。

「きれかったな」

「一緒に良かった……」

再び大きな波が打ち寄せる。今度はシャボン玉が生まれるどころか……

「わあー！」「キヤア！」

慌てて階段を駆け上がるが間に合わない。頭から波を被った。海水ではない。汚水だ。

「クサイ！」

「俺、やってへんで」

「それ、ウチのセリフや」

\*

夏だからいいが、ずぶ濡れのまま車に戻る。俺が運転席に座る。

「エエ雰囲気やったのにぶち壊しや」

座席下からサンダルを取り出す。車内に異臭が充満する。窓を全開してから美英子がサンダルを履く。

「変なモンが一杯海に流れ込んでる。イヤやわ」

「公害や！」

「ほんまや。あつ、せや。忘れてた」

上半身をひねって後部座席から紙袋を取り出す。

「これ、追加の『ありがとう』」

紙袋からきちんとたたまれた茶色のカーデイガンを出す。

「松本駅で貸してくれた……忘れんと持って帰って」

「えー、覚えてへん」

「あのとき『化粧ケース忘れてへんか』って言ったやん。覚えてる？」

「覚えてる。半分イヤミやったなあ」

「気にしてへん。でも気付いたん。あのあと、もつと大きなモン忘れるとこやったん」

「大きなモン？」

「マモルの意固地な気持ちの裏側……」

涙を使い果たしたのか、うつとりとした目で見つめる。

「マモルの気持ち、忘れんように、涼しくなったら毎日このカーデイガン着てたん」

クサくても抱かずにいられない。

——一人やけど、独りやない……んや

乱暴にキスする。カサカサ唇だから刺激が強い。美英子は我慢できずに唇を離すと囁く。  
「ウチら、どんな夫婦になるんやろ……ね」